

Get Ready !

TBS の日曜劇場に「Get Ready !」というドラマがある。これまで6回の放映があり、まだ最終回を迎えていないので、毎回録画して楽しんで見ている。

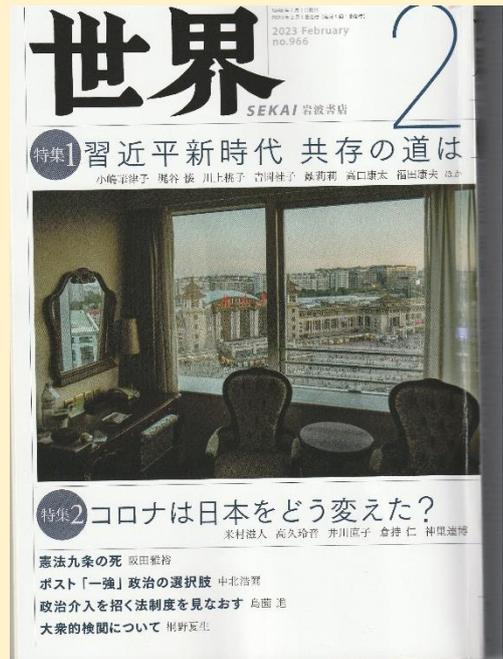
著名な大学病院が一つの舞台だ。ここにすでに手遅れの状況まで病状が進んで、手の施しようがなく余命時期だけ宣告をされた末期患者がいる、彼の前にどこから



かピエロのような黒い仮面をつけた不思議な闇医者が現れ、今の医療界では承認されていないが先進の医療技術で、助かる医療法があると闇治療を勧める。本人の生きる希望やその延命価値などの条件がそろえば、闇治療手術が始まる。合言葉が「Get Ready !」不思議な手術室が現れる。日本の公式医学界では認められていない iPS 人工臓器の移植などの先進治療法を駆使して、病原箇所を消し去ってしまい、生きることができるようになる。3次元空間を自在に飛び回る IT の新技術との組み合わせで幻想的な世界を現出しておもしろい。彼ら闇医師の対極に登場する大学病院の院長がいるが、彼は新医術に走ろうとする若手が出ると容赦なく医学界から放逐するような権威主義者である。この両者を描くことで、このドラマが告発していることは、日本の医療の保守性と後進性だ。

つい最近、海外での臓器移植を斡旋して命を救った仲介者が医師法違反で逮捕された事件があったが、このドラマを連想させる。彼の行為は法律違反だが、救えるいのちを救おうとしたのだ。

ドラマだけなら面白いですが、雑誌「世界」の2月号の特集記事「コロナは日本をどう変えた？」は、日本の医療界のこのような体質の問題点を正面から取り上げていた。日本の医療界の保守性が我が国のコロナ対策の遅れと被害の拡大を生んでいることを指摘していたのだ。我々は幸いワクチンの優先接種にあずかっているし、通勤の満員電車に入る必要もないので、火事場の見物やじ馬でいるのだが、その渦中にある働く人々学生たちには、知らないではいられない日本特有の深刻な問題があったのだ。



この世界の記事が指摘している問題は二つ。まず第1は、日本にも波状的に襲ってくる新型コロナウイルスのたびに、患者数も死者数も増大したが、世界は逆で第1波こそ大きかったが、その後はそれに学んで体制を立て直し、そのあとの波には感染者も死者も大幅に減少したのだ。日本だけがその経験に学ばない欠陥を露呈した。その原因に日本の医療界の縦割り縄張り体制にあるというのだ。

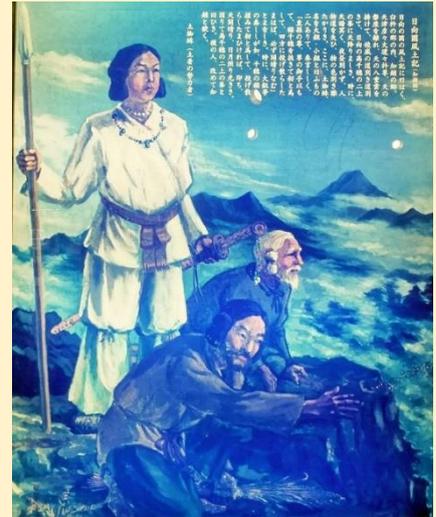
例えば日本の医療界は臓器ごとに専門があり、その縦割りの中で地位を高めていく体制だ。コロナで病床が一杯になって担当する医師も看護婦も過酷な勤務を強いられていても、例えば消化器の外科医はコロナにはたずさわらない。逆に手術が延期され暇になってしまうが、助けない。患者は入院を断られ、たらいまわしにあった挙句、自宅でなくなるケースが多発したことはご承知のとおり。

ところが欧米では専門医制はあるが、コロナパンデミックに対しては、大規模な野戦病院体制がひかれ、専門分野を問わず医師総出で患者を診るのだ。日本のように入院先が見つからず在宅治療でなくなっていくという不幸はなかったのだ。

最近 NHK が「医療のデジタル革命」と題した3回のドキュメンタリー番組を放映していた。医療にデジタル技術が入り始めて、どう変わるかを追求していた。ここでは AI の導入が大活躍する。コロナとインフルエンザの感染検査に、今は検査棒を鼻の奥に差し込んで体液を採り検査するが、気持ち悪いし痛い。それを喉の状況をカメラで撮るだけで、その画像から AI が感染の有無と種類を判定してくれる技術が生まれている。また大腸がんの手術で危険なのはがんの近傍にある血管や神経を誤ってメスを入れることだが、AI 応用の3次元画像でその危険位置を教えて執刀の危険を防止する技術が生まれている。これは「Get Ready!」のドラマにも出てきそうな場面だった。この医療のデジタル進歩は、日本でも一部の先進事例はあるが、全体として日本は先進国に比べて遅れているようだ。その遅れの原因は、ここに取り上げた同じ日本の医療界の保守性だそうだ。

医療界だけを責めるのはよくない。この体質すなわち、縦社会の上部への忠実と、下への無責任体質は実は日本の国民性といってもいい性格であるのだ。私は10年来 縄文弥生か

らヤマトまでの成り立ち経過を調べて、中心となる弥生族が天孫族との同盟忠誠をもとにおとなしい縄文人を従えていった歴史の中で、この精神的性格が形成されたことを発見した。今もそれは変わらず、医療の世界にも生き続けているのだ。



自分を振り返ってみても、医療のデジタル化に参加する第1歩は、マイナカードと医療保険証と診察券さらにカルテの登録まで進めて初めて本格化するのだが、まだ保険証の一体化までしか進んでいない。スマホの利用も石原さんのエッセイを読んで、大いに刺激を受け学ばなければと思っている。

以上